



図7 調査区からの出土遺物

⑤ 今後について：現地調査は終了しました。今後、記録した図面や写真、土器類を整理し、資料として蓄積するとともに、展示等で活用していきます。



図8 発掘作業の様子

発掘調査速報展示

神戸遺跡

開催期間：2023.3.25～6.4

松阪市文化財センター



図1 神戸遺跡と周辺の遺跡分布図

① 調査のきっかけ：宅地開発工事に伴い試掘調査を行なったところ、遺構を確認したため、工事による影響が遺跡に及ぶ範囲（道路部分約266㎡）の発掘調査を実施しました。

② 調査期間：令和5年2月9日～令和5年3月18日

③ 調査成果：調査区内から環濠1条をはじめとする弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にかけての遺構と中世（鎌倉～室町時代）の遺構を確認しました。

弥生時代の環濠は、当時の集落を囲むように掘削された大きな溝（幅約2m・深さ約1.6m）で、遺構掘削中に多量の土器が出土しました。また、井戸跡からも完全な形の壺形土器が出土しました。出土した遺物の特徴から、集落が営まれた時期はおおよそ1700年前と考えられます。

また、中世の柱穴が多数みついています。中には環濠が埋まった後に掘られた柱穴もみついています。さらに、複数の柱穴から当時の建物の柱材の根元（柱根）が確認されました。

④ 出土遺物：環濠から多くの弥生土器が出土しました。弥生土器は、壺や高坏などさまざまな器種があり、その大半が当時の人々が日常生活で使用していたものです。完全な形を保ったものも多数出土しており、弥生時代の生活を研究するうえで貴重な資料の発見となりました。また、中世の柱穴が多数見つかっており、中には環濠が埋まった後に掘られた柱穴も見ついています。さらに、これらの柱穴の中には当時の建物の柱材の基部（柱根）が多数確認されました。

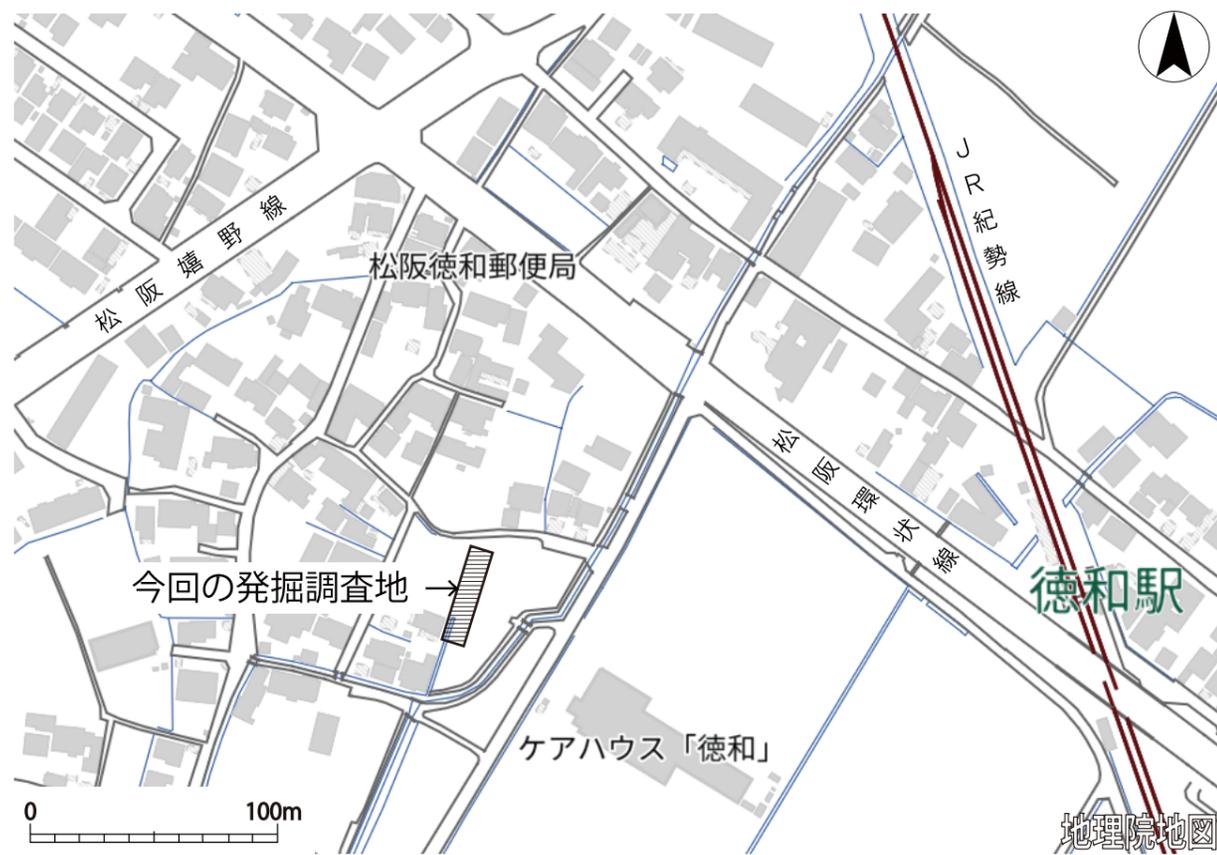


図2 神戸遺跡調査区位置図

神戸遺跡の位置と歴史的環境

神戸遺跡の立地する松阪市下村町は、松阪市中心部南端を流れる金剛川とその支流真盛川にはさまれた神戸地区に位置します。古代・中世の文献には「飯高郡神戸」と記述があり、飯高郡に置かれた神宮の神戸(神社の土地・領地)がこの地域に存在したため、現在の地域名の由来になったと考えられます。

松阪市内には、伊勢湾にそそぐ複数の河川が存在します。これらの河川は、市域西部に位置する丘陵、紀伊山地の一部である台高山地を水源とし、蛇行を繰り返しながら東方向に流れ伊勢湾にそそぎます。松阪市東部一帯は、広大な沖積平野が形成されています。この沖積平野には、南の丘陵地帯から北に伸びる半島状の地形が複数あります。遺跡周辺の地形を観察すると、神戸遺跡も南西から半島状に伸びる丘陵の先端部に立地することがわかります。

神戸遺跡で人々の生活が営まれた時期は、大きくは弥生時代後期末～古墳時代前期初頭、中・近世の2時期になります。ここでは、弥生時代の神戸遺跡周辺の当時の状況について説明します。

松阪市内の弥生時代の遺跡は、伊勢湾岸にひろがる沖積平野とその背後にひろがる丘陵地帯を中心に数多く存在することが知られています。北部の中ノ庄遺跡や筋違遺跡では前期の遺構・遺物が確認され、この一帯が三重県内でも早い時期に弥生文化が伝わった地域であることが知られています。

続く中期になると遺跡数はまだ少なく、調査された遺跡数もさほど多くないので、その実態はまだ不明な点も多いです。

後期になると遺跡数は一気に増加し、松阪市内では主な河川の流域で周囲に環濠を巡らせた集落が確認されるようになります。特に弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にかけて(約1,700年前)の金剛川流域では、後期末に草山遺跡・村竹コノ遺跡のふたつの大規模集落がほぼ同時期に営まれる状況があり、ふたつの遺跡の関係や当時の社会状況等が注目されていました。今回の調査によって、草山遺跡・村竹コノ遺跡の中間に位置する神戸遺跡も集落の周囲に環濠を巡らすことが明らかになりました。また、環濠から出土した土器もほぼ同時期のものことから、当時の金剛川流域には周囲に環濠を巡らせた集落が比較的接近した状態で同時期に存在していたことが明らかになったのです。

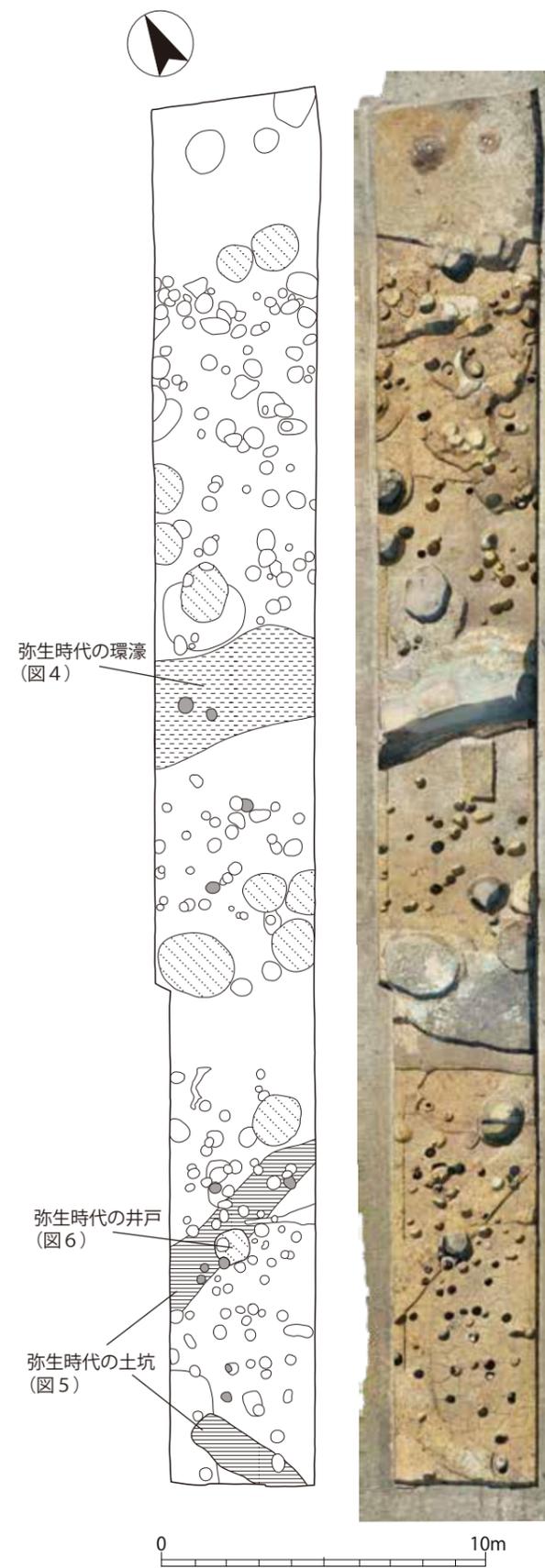


図3 検出遺構略測図(左)1:200

- = 柱根が出土した穴
- = 検出された井戸

調査区全景写真(右)1:200



図4 環濠の遺物出土状況



図5 弥生時代の土坑からの遺物出土状況



図6 弥生時代の井戸からの遺物出土状況